INFORMATION

今年も残すところあと１ヶ月。みなさんにとって、今年はどんな１年でしたか？
さて、寺町倶楽部では、年末年始の交流会として忘年会、新年会を企画しています。ぜひ、ご参加ください。
また、前号でお知らせした企画の続報もお伝えします。会員のみなさんの自発的な企画が、これからの倶楽部活動の活性化にもつながります。みなさんも、自分だけのオリジナル企画を実現してみませんか。

なにわ映像総研～映画夜話～

会員の武藤貴信さんが企画する映画夜話。９月にスタートしたこの企画も、いよいよ12月の第４回、１月の第５回で終了となります。

第４回には、今大阪でもっともエキサイティングな映画館「シネ・ヌーヴォ」支配人の松井寛子さんをお招きします。松井さんが考える21世紀の映画館とは？、などをお話しいただく予定です。

そして最終回の第５回は、映画監督・田中徳三さんをお招きします。「悪名」シリーズなど、日本映画が一番熱かった大映の全盛期、そして勝新、雷蔵らとの若き日々を語っていただく予定です。ぜひ、ご参加ください。

【第４回　イケイケ爆走劇場】
・12月17日(木)　19:00～21:00
【第５回　野暮はおよしよ】
・１月28日(木)　19:00～21:00
・参加費　￥500
・問い合わせ
　武藤　Tel0722-62-0769

写真屋なぎちゃんの写真考座

第１回を終えたこの「写真考座」。これからは、だいたい２ヶ月に１回のペースで開催していこうと考えています。

第２回の今回は、「写真の構図」について考えます。

今回からの参加も大歓迎です。あまり難しく考えないで、いま持っているカメラで、気軽に参加してください。

みんなで楽しく趣味の世界を広げてみませんか。

【第２回目】
・12月14日(月)　19:00～
・費用　無用。但し、フィルム等の実費は各自負担。
・持ち物　自前のカメラ
・問い合わせ
　寺町倶楽部　Tel06-771-7641

第14回寺子屋トーク

今年最後の寺子屋トークは、ホリスティック教育研究会代表の手塚郁恵さんを講師に開催します。講題は「“自信”を育てる子育てワーク」。

母親の占める役割が大きい現代の子育て。子育てへの不安をかきたてるような、子どもをとりまく様々な問題や事件があとを断ちません。

子育ては、自分育ち。子どもの問題を通して、母親がどう生きるか、現代の子育てへの大きな課題ではないでしょうか。

今回は、ホリスティック教育の第一人者である手塚さんが、子育ての中で、家族、親子のこころのつながりをどのように育てるのかをお話しいただきます。

◆日時　12月７日(月)
10:00～12:00
参加費　会員￥500、一般￥1000

ワイワイ楽しく年末年始の交流会

【年忘れ交流会】

12月26日の自分感謝祭の２回目終了後、「年忘れ交流会」を開催します。

今年最後の交流の場。会員の方はもちろん、お友だちもお誘い合わせの上、自分感謝祭と併せて、ぜひご参加ください。

○日　時　12月26日(土)
自分感謝祭２回目(18時～)終了後
○参加費　５００円
※お電話でお申し込みください。
※食料品１品(生物不可)をご持参ください。

【友だちの輪新年交流会】

忘年会に続いて、新年交流会も新たに企画しました。

有志による漫才、日舞、ジャズライブなどなどステージも充実の内容。ニューイヤーを賑やかにみんなで祝いましょう。

○日　時　１月８日(金)
新年のお勤め・修正会（18時～）終了後
○参加費　５００円
※お電話でお申し込みください。
※食料品１品(生物不可)をご持参ください。
※お手伝いしていただける方は、16:00に集合してください。

サリュ VOL.11
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発　行　日　1998年12月４日
（偶数月発行）
編　集　人　池野　亮
発　行　所　應典院寺町倶楽部
〒543-0076大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL06-771-7641
FAX06-770-3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

1998 DECEMBER
vol.11






人はみんな違います。姿形、性別、年齢、育った環境……、どれをとっても今まで出会った人たちみんな違います。しかし、その違いをあまり意識せずに、何となくつきあっている。同じことばを話し、同じ国に、町に、職場に、学校にいるから？

しかし、人との違いを認めること、違った存在を知ることが、人と人との理解へとつながるのではないでしょうか。

それぞれの歩き方……。それぞれが違うのだから、それぞれの歩き方があっていいはず。コモンズフェスタで出会った人たちは、あたりまえだけど、だいじなことを感じさせてくれました。

應典院にNPOが集って語った2週間

COMMONS FESTA '98「それぞれの歩き方」



寺町倶楽部の秋のメイン企画「コモンズフェスタ'98／それぞれの歩き方」（第7回大阪生涯学習フェスティバル協賛事業／大阪市教育委員会他後援）が、11月3日からスタート、13日間で600名を超える参加者でにぎわいました。期間中は、「福祉」、「介護」「教育」、「国際協力」などNPO13団体が結集して、さまざまな企画を実施、その一部を紙面に採録して、お伝えします。

この企画は、3月に橋本義郎さん（大阪国際女子大学教員）の福祉に関する写真展の企画からスタート。それを軸にもっとふくらませていこうと、自然発生的に実行委員会が立ち上り、6月には第1回の会合が招集されました。協力団体は、13団体。幅広い呼びかけもあって、「福祉」や「介護」、「教育」、「国際協力」といったNPOが参加、ジャンルを問わない、まさに「それぞれの歩き方」の通り、多種多様な企画が出揃いました。

タイトルの「コモンズフェスタ」とは、異なった文化がぶつかって生まれる、出会いとつながりを願ってネーミングされた造語。また、「それぞれの歩き方」には、一人ひとりの個性が生かせる社会づくりへの願いをこめました。期間中、シンポジウム、ワークショップ、パフォーマンスなど形態を問わない、数々の催しでにぎわいました。

福祉はお寺の原点

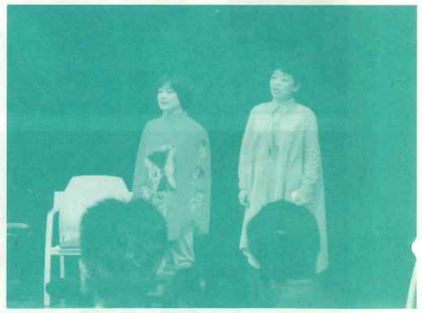
お寺の源流は、まさにいまのNPO（非営利組織）。昔からお寺は、福祉や医療、教育、芸能の開かれた場でもありました。その原点は、公（パブリック）でも、私（プライベート）でもない、第3の場としての共（コモンズ）であり、今回のフェスタではその空間づくりを、NPOと協働して創造するものとなりました。寺院の文化を今日に再生する試みは、應典院を核として地域コミュニティを再構築する確かな手掛かりともいましょう。

「聖徳太子が、四天王寺に設けた悲田院や施薬院が日本の福祉の第一頁。広い意味で、日本の福祉は仏教の社会事業として始まりました。また、大乗仏教の教えとはそれぞれの違いを認めあう、受容と包括の心にあふれていたと思う。今回のコモンズが、應典院＝お寺にとっても、たいせつな接点のあるところですね」と、もう一人の実行委員長を務めた秋田光彦住職。

文字通り、地域と市民とお寺をつないだ、画期的なフェスタとなりました。

場の意味を深める

11月3日、「ソングコンサート～それぞれの歩き方」でオープニング、歌手の中川保子さん、山本基子さん、石田勝己さんらが、谷川俊太郎詞による「歩く歌」など全18曲を歌い上げました。会場は、車椅子の観客を含め、約80名が参加、軽くワインを飲みながらくつろいだ雰囲気のコンサートとなりました。また、幕間には、今回フェスタに参加した13団体の面々からアピールがあり、雰囲気を盛り上げました。



13日には、寺町倶楽部が主催して、第13回の寺子屋トーク「大闘論会〈教育〉って何だ！」を開催、街の中の8人の教師と東京大学・汐見稔幸助教授をゲストに、これからの教育について熱く語り合いました。参加者は62名。

クロージングは、スウェーデンからメーラレン大学福祉研究所のホーカン・カルプさんら4人のゲストを招き、多文化交流お話し会を。福祉の本場といわれるスウェーデンの現状を、日本と比較しながらわかりやすく語っていただきました。

13日の間、20のイベントを繰り広げたコモンズフェスタ'98 。いろんな人たちの参加は、これまでとは少し違う應典院の「場」をつくりだしたようです。こうした積み重ねが、「場」の意味を深め、誰にでも開かれたお寺の存在感として育つことを願いたいものです。来年は、どんな「コモンズ」が生まれるのか、どうぞお楽しみに。

新たなものを創りだす「場」

コモンズ実行委員　森川明義
（読売新聞記者）

ひとりでいるのが寂しくなった時、喜びを人に聞いてほしい時、何か「さがしもの」がある時……。そんな時、肩肘はらずに行くことのできる「場」を持っている人、知っている人は幸せだ。人は、人、そして何かとのつながりを感じることによって心が満たされるのだから。

「場」は具体的な場所であっても、抽象的な人のつながりでもいい。應典院はそのふたつを併せ持っていた。13日間にわたる「コモンズフェスタ'98～それぞれの歩き方」の運営にかかわって初めてこの「場」を訪れ、そして、「場」にひたる機会に恵まれた。

「場」は変幻自在だった。集う人々の思いをそのまま吸い上げ、表出してくれた。でしゃばらず、あくまでも自然体に。何者をも受け入れてくれる「大きさ」があった。

「場」は人によって変わる。コンサートが行われた会場で、教育討論会があり、シンポジウムがある。トークや演劇もある。パーティーまであった。2階のロビーで墓地を眺めながらワイングラスを傾けるのもなかなか心安らぐものがあった。



森川　明義さん

「場」は人々をエンパワーメントしてくれる。期間中はできるだけ多くのプログラムをのぞいてみようと思った。中には、積極的な動機もなく、ある意味では義理で参加したプログラムもあったが、行くと必ず何かがあった。それは新しい出会いであったり、それまで気づいていなかった自分を知ることであったり……。そのひとつひとつが生活していく上でのパワー源になり得るものであった。また、そうしたいと思った。



「場」は人をつなぎ新しいものを創りだす。フェスタの初日、すばらしいボサノバを聴かせてくれた戸梶賀世子さん。今度、その戸梶さんのファンクラブが集まった人たちの間で作られることになったという。光を失い、つらい日々を送った後、結婚、出産、そしてまた音楽の世界を歩みはじめた戸梶さんの生き様が、人をつないだ。そこからはまた何かが生まれるのだろう。

翻って外に出てみる。大都市には大きな建物はあるが、それが公共物であってもどこか外部の人間を寄せ付けないよそよそしさがある。人の集まりもたくさんあるがそれも同じかもしれない。何か用がなければ入ってはいけないような気にさせる。人がたくさんいて、その中に自分の居場所をさがせない孤独感に似たものがある。

アポもいらない。「行けば何かがあるだろう」。気軽に、そして用がなくてもふらっと立ち寄れる應典院のような「場」がもっとほしいと思う。何もイベントがなくても何かが得られるだろう。そしてその人なりの何かをその場に与えることができるだろう。人がいなければ誰かを待っているのもいい。

期間中、「場」からいろんなものを与えてもらった。「場」の持つ力というものを改めて感じた。人が生きていく上で、このような「場」で休めるとほっとする。

EVENT REPORT 10、11月に寺子屋トーク連続開催!

CAPのプログラムに多くの共感

第12回寺子屋トークは去る10月27日に、CAPプロジェクト・田上時子さんをお招きし、開催しました。

CAP＝子どもの虐待、いじめ防止プログラムのロールプレイの上演や、現代の子どもを取り巻く状況や、数々の事件への所感などをお話しいただきました。

決して人ごとではなくなった子どもをとりまく事件。参加者のほとんどはお母さん。真剣に聞き入る姿が印象的でした。参加○名。

〈教育〉って何だ!!

第13回は、コモンズフェスタの催しのひとつとして、11月9日に開催しました。「〈教育〉って何だ」というテーマのもと、メインゲストに東京大学助教授・汐見稔幸さん、コーディネーターにフリーライター・野寺夕子さん、そして8人の“街の中の教師”の方々を中心に、大討論会を実施しました。

教育は、学校だけでなく、家庭、そして地域社会が、それぞれ教育機能を発揮し、相互に連携して行われなければならないことが重要だと、いわれてきました。“街の中の教師”の方々が語ることばから、まさしくその重要性を再認識させられました。

「最近の子どもの問題は、今の教育システムに対する子どもたちの抗議のあらわれではないか」と汐見さん。

現代の教育システムは大人が作ったもの。ならばそれを変えるのも、私たち大人のはず。いまの学歴偏重とは違った価値観を自分自身の問題として、大人が捉えなおす必要があるのではないでしょうか。参加13名。

ワイガヤ時空のコモンズフェスタ！

座談会

わたしたちの、「それぞれの場」について語りあおう。

さまざまなジャンルから、ユニークな人と企画が集まったコモンズフェスタ'98。各ＮＰＯから集まったコモンズ実行委員会は、それ自体が何かをうみだそうとする、ひとつの新しい「場」でもありました。出会いからつながりへ。実行委員の３人に代表していただき、それぞれの「場」について語り合っていただきました。

■違いどうしがつながる

――13日間にわたるコモンズフェスタが無事終了しました。当初この企画の契機は何だったのですか。

橋本／北欧や日本の福祉を題材に写真を撮りためたものがあって、應典院で写真展をやりたいと、３月頃、相談したのがきっかけです。

その時、せっかくだから何かやりましょうよ、と秋田さんから提案があって、いろいろな仲間に声をかけたのが始まりです。結局、福祉や教育、国際協力、アート系など13の団体が集まりました。



「多文化交流お話し会」スウェーデンから、4人のゲストを招いて、北欧福祉事情を巡ってトーク。大学教員や自治体職員、留学生など、国際色ゆたかなに繰り広げられた。ストックホルム大学東洋言語研究所のアンベッケンさん（写真右）は、日本人よりきれいな日本語を喋る才媛。

長見／障害者関係でもいろんな集まりはあるんですが、いつも同じ場所で同じ顔ぶれでは、息がつまる感じ。

はじめて應典院を見て、これまでとは全然違った空間でしたから、ここなら何か新しい試みができるな、と直感しました。

安土／実行委員会が集まって、まずどんな内容でまとめていくか、議論があったわけですが、その時、橋本さんが提案された「それぞれの歩き方」って、今回のフェスタ（祭り）の、全体を言い表していて、いい響きのタイトルでしたね。

橋本／何とでも解釈できる言葉しか残らなかった感じですが（笑）。

これからの福祉って、いろんなものとつながらないと充実していかない、と思うんですね。「福祉」とか「障害」など、言葉に限定されたつながりは、やはり狭い出会いしか生まない。それを逸脱してみよう、というのが当初のねらいでした。

長見／多文化共生センターをはじめＮＧＯのみなさんと集合して何かやるなんて、私には初めての経験でしたね。

安土／やはり実行委員会の席で、秋田さんが「應典院は土で、みんながそこに水と光を注いで、花を咲かせてくれたら」と言われたのが、とても印象的でした。

花もいろいろで、大輪の花もあれば野花もある。人間もひとりひとりの存在は違うけど、それぞれの花を咲かせてみよう、というのが、私の理解でした。

橋本／安土さんのコズミックダンスはいかがだったんですか。

安土／コズミックダンスは、自己を開いてあるがままに踊るワークショップなんですが、頭で考えずに音楽に身体を預けて体験することがだいじなのね。今回の参加者はみんな初めて経験する人ばかりだったけど、「子どもにかえれた」とか「知らない自分を感じた」とか、いい受け止め方をしてくれたみたいです。

コズミックダンスは、障害者やお年寄りや子どももいっしょにやるとだんだん垣根がとれて、それぞれの違いがつながって、ゆるやかなひとつの世界をつくったりするんです。

橋本／なるほど。「それぞれの歩き方」のまんまですね。



橋本義郎
コモンズフェスタ実行委員長。大阪国際女子大学で社会福祉を教える。①守口市生まれ②Ａ型③写真展で、「私もあんな写真撮ってほしいわ」と言ってもらったこと④旅行をしている。友人と雑談をしてお茶を飲んでいる。

安土明中子
歌手。パフォーマー。地域でシャンソンからコズミックダンスなど、幅広い教育活動にかかわる。①大阪市生まれ②Ｏ型③崎峻彦の本「何もなくて豊かな島」④60歳から自給自足の生活に入る。



写真キャプション　①生まれ②血液型③最近感動したことうれしかったこと④あなたの老後のイメージは？

■介護者の問題って何？

――日本の介護者って、まだ職業として確立されていない面がありますね。そこで長見さんたちは、フリーの介護者の組織をつくろうとされているわけですが…。

長見／いまの福祉は施設や専門職が中心になったサービスになっていて、地域で生活している障害者とその介護者の存在はまだまだ希薄なんです。私たちは障害者の介助を仕事にしているわけですが、両者の間には制度や組織が介在していて、本当の意味できちんと出会っていない。一番肝心な介護労働の問題を、介護者と障害者がいっしょになって話しあう機会もなかったわけです。

橋本／介護者の生活条件はまだまだよくありません。自分で仕事を探せないし、十分な保障もない。当然、独立した介護者の組織もないわけです。

介護者はロボットではない。感情もあれば欲求もある。はっきり声を上げる介護者グループとして、長見さんたちが呼びかけを始めた。

長見／障害者中心のネットワークは、それぞれにあって、けっこう活発なんです。でも、それを対行政だけでなく、対社会につないでいくルートがあまりなかった。介護者の職業問題を、ふつうの市民レベルに持ち込む機会はなかったので、今回のフェスタは、そのひとつの試みになったと思います。



「陽気にボサノバ」フェスタ初日のコンサートは、全盲の歌手・戸梶賀世子さんのライブ。ワインを飲みながら、おしゃれなほろ酔い音楽会となった。会場の本堂は車椅子の参加も多く、120人で満杯。歌の力、生きる力の情熱に圧倒された興奮の一夜。主催は、ココペリネットワーク準備会。

■出会いの場を紡ぐ

――企画を通して、ご意見があればお願いします。

長見／初日にボサノバのコンサートをやりましたが、聴きにきた障害者の反応がずいぶん違いました。

以前ぼくと知人が主催したイベントでも感じたことなんですが、どうしても障害者が特別なお客さんとしてもてなされてしまって、特殊な場になりがちなんですね。会場も福祉会館的なところが多いですし。それが、この時はまったくふつうのコンサートホールの雰囲気で、いつになく緊張しているんですね。

橋本／いわゆる「障害者のため」という雰囲気って不自然ですよね。障害者のことを意識する人もいれば、そうでない人もいる。それが、いまの「ふつう」の社会なんだと思う。

長見／障害者が「ふつう」にふれる機会が増えたような気がします。。これから、いろんな應典院の催しを紹介したいな、と思いました。

安土／それと、橋本さんや川村さんの作品展が、上手にオープンスペースをつくっていたでしょう。ギャラリーみたいな押しつけがなくて、通りすがりの人がパッと作品に出会ってしまう、という雰囲気がよかった。

長見／應典院の館内を、全部展示で埋め尽くしたのは圧巻でしたね。

安土／あとね、車椅子の人の参加も多かったし、いろんな違いをもった人たちの出入りがあったわけだから、それを出会いにつなぐための工夫とかが、もっとあればいいな、と思いました。

橋本／期間中、いろいろ多彩な催しがありましたが、私たち実行委員自



長見有人
全身性障害者介護人。フリーの介護者グループ「あかね連絡会」の世話人。①京都生まれの北海道育ち②O型③映画「三月のライオン」④ヨーロッパの田舎で暮らしたかったが、いまはイメージなし。

身もすべてに参加できたわけではない。もっとお互いが交流しあえれば、という反省はありますが、でも袖擦り合うも多生の縁で、とりあえずこうして顔を合わせたことが、貴重な入口なのではないか、と思っています。

つなぐための配慮もあっていいわけだけど、とにかくそこに行って、率直にぶつかりあうような機会があることが肝心だ、と思います。だからこそ、「場」というものがだいじなんだと思う。そういう「場」を、ふつうの街中にいくつも生み出していくことが、たいせつなんじゃないでしょうか。

――最後に、これからの應典院にひとこと。

長見／障害者も介護者もいろんな人や社会と出会いたがっている。誰とでもいっしょに議論できるような、そういう場をつくりだしていってほしいです。

橋本／福祉の世界に限りませんが、どんな世界でも、「優等生」でない人に目を向けていってほしい。マイノリティ（少数派）の中のマイノリティを、意識して支えていってもらいたいと思います。

安土／ますます新しい出会いの場となってほしい。それが、本来のお寺の姿だもの。それと、今度ここでシャンソンのコンサートやるので、個人的にはぜひ生のピアノを買ってほしい（笑）。



「コズミックダンスと倍音声明」
音楽に合わせて自然に、リラックスして、身体運動するコズミックダンス。1枚の布や棒を使って、だんだんとからだがイマジネーションしていく楽しさは、自分の内面と対話する不思議な体験。
お寺らしく倍音声明のワークショップも、ぴったりはまって快感。

VOICE

今回のVOICEは、学生会員の川村敬さん。川村さんは、大阪教育大学教育学部附属養護学校高等部に通う16歳。コモンズ・フェスタでは、絵画展を開催されました。應典院での初の個展の感想をインタビューしました。



橋本先生から「絵画展」をしてみないかと、お話をいただいた時、夢だと思ったんです。うれしさ半分、びっくり半分でした。いままでにためてきた作品もありましたが、展示し終えた時は、やっとできたとほっとしたんですよ。

今回の下見で初めて應典院に来た時は、本当にここはお寺かな？と思いました。いろんな催し物やってるホールのような気がしたので…。

コモンズ・フェスタの期間、時間を見つけて應典院に来てるんですけど、来るたびに、サイン帳を見ては、“ああ、ふえてるな”とうれしくなるんですよ（ニンマリ）。案内していた学校の先生、友人、兄弟の友だち、知り合い、知らない人といろいろ名前があり、時には、話しかけられたり……。ぼくは、作品を見てもらえるだけで、満足です。ぜひ、またやらせてほしいです。もっともっと多くの人に、作品を見てもらいたい。そのためにも、應典院がもっと有名になってほしいですね。

みんなが、気軽に集まれる場所になればいいなあ。（ぼくは、あまり興味がないけれど）歌のイベントとか、小さなことを楽しめる場（ゲーム大会やトランプ大会など）になれば、きっと、みんなが来ると思うんです。ぼくも、また作品を描いていきたいです。そのためにも、「お母さん、コンピューターの新製品買って!!」

秋田住職発 應典院掲示板

13日間の会期を経て、コモンズフェスタ「それぞれの歩き方」が、無事終了しました。詳しくは特集記事に譲りますが、その多くに立会いながら、多彩な人たちと出会うことができました。人が歩くということ、笑うということ、語るということ――ぼくらが忘れがちな、人間のいちばん基本のところについて、深い体験をいただきました。福祉についてのサービスや専門職の充実もだいじですが、つまるところ、ぼくたちひとり一人の心根にある、いのちのイメージをもっとゆたかに語ったり感じたりすることのたいせつさを感じました。

出会いが、たくさんの気づきを生んだ、すばらしい「場」の体験でした。

法然上人25霊場を巡拝

去る10月25日、恒例の法然上人25霊場参拝のバスツアーを実施、大蓮寺・應典院有縁の方々42名の参加がありました。

第4回目の今回は、念仏の元祖・法然上人がご降誕された誕生寺（岡山県・津山市）を参詣、復路の途上で、有名な浄土寺を拝観しました。身の丈5m余りの巨大な阿弥陀三尊像も立派でしたが、西日が堂内に射し込んで、西方極楽を描きだす、という光の効果がじつに荘厳でした。

来年は5月と10月の2回実施の予定です。

子ども七五三法要厳修

去る11月15日、應典院で初の子ども七五三法要を厳修、かわいい子どもたち19人が、家族とともに参詣してくれました。

七五三といえば、お宮さんの行事として定着していますが、仏式の厳かな儀式もなかなかのもの。堂内は赤い絨毯が敷きつめられ、オルガン演奏の中を、子どもひとり一人が献花するなど、雰囲気たっぷりで、好評でした。

秋田住職から、仏さまの智慧の水である潅頂を授かり、子どもたちも神妙な面持ちでした（写真下）。



秋のガーデニング講座も好評

好評の秋のスクールは、「イングリッシュガーデン物語」と「干支はがき絵講座」、「アロマテラピー」を開催しました。

春に続いて人気の「イングリッシュガーデン物語」は、アール・フュージョンの白砂伸夫さんがコーディネーターとなって、3回連続で開催されました。3回目には、フラワーアーチストの坂上奈智子さんが、コンテナガーデンを引き立てるプランツについて実習指導、間近となったクリスマスの華麗な飾りつけに、参加者は一様に満足げでした。

【新入会員ご紹介】
（1998年11月30日まで）

10月7日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
松井　千穂　大阪市東淀川区
森代　幸重　大阪市生野区
大津　伸子　大阪市東住吉区
寺田　紀子　羽曳野市
【奈良県】
乾　裕紀子　奈良市

○学生会員
【大阪府】
川村　敬　堺市
【兵庫県】
中田　宏道　西宮市

以上7名

大蓮寺で除夜の鐘

應典院の本寺・大蓮寺では、毎年大晦日の除夜をの鐘を行っています。申込み制で誰でもつける鐘として年々参詣も多くなっています。12月31日23:00～つきはじめとなります。ぜひどうぞ。

トークサロンの予定

11月のサロンは、7名の参加。12月は、住職が検査入院のため中止となりました（大したことはありませんので、ご心配なく）。

来年1月は、トークサロンはありません。少し先になりますが、2月10日（水）19時と2月13日（土）14時の2回開催ですので、お間違いなく。

歳末恒例・自分感謝祭は12月26日開催!!

昨年に引き続き、自分感謝祭が来る12月26日に開催されます。

この儀式は、今年一年をふりかえって自分の行いを懺悔する、應典院だけのオリジナル法要。一人ひとり、懺悔のカードを仏前で浄焚（聖なる火）にくべ、新年の新たな出発を誓います（秋田住職のファイナルメッセージもあります）。昨年の第1回も、「心洗われた気分」「自分自身にご苦労さんといいたい」「世界が広がった経験がうれしい」など、たくさんの感動を招きました。荘厳なオルガン演奏の中、光に包まれてながら、一年の終わりにふさわしい「鎮めの儀式」を堪能してみませんか（写真は昨年の模様）。



なお、18時からの夜の部は終了後に「年忘れ交流会」を開催、持ち込み歓迎の忘年会ですので、こちらもふるってご参加ください（参加500円／要Ⅲ予約）。

◎自分感謝祭／應典院主催・應典院寺町倶楽部協力／12月26日（土）①14時～②18時～／参加無料／数珠は各自持参／Tel06-771-7641 まで。